

「西山宗因の研究」は、近世初期の連歌師・俳諧師西山宗因（1605-1682）を対象とする研究論文である。

肥後加藤家に仕える下級武士の子として、慶長十年（1605）、熊本に生まれた宗因は、家老加藤正方の影響下に和歌・連歌を学び、主家改易に伴う約十年間の在京と牢人生活を経て、正保四年（1647）、四十三歳にして摂津中島天満宮の連歌所宗匠となった。以後、大坂天満を拠点とし、諸大名の要請を受けて連歌師として全国に行脚するかたわら、俳諧師としても活躍した。寛文後期から延宝にかかる晩年の約十年間、三都の俳壇を席卷した宗因流の俳諧は、のちに談林俳諧と呼ばれて、俳諧史上の一時代として認識されるに至る。

長らく談林俳諧の総帥として理解されてきた宗因の研究に画期的成果をもたらした野間光辰は、「連歌師宗因」（『国語国文』22-9、1953年9月）をはじめとする諸論考において、宗因の本業はあくまで連歌にあり、俳諧は余技であったことを主張した。戦後の連歌俳諧研究は、野間が提唱した「連歌師宗因」像を前提として蓄積されてきたと言える。しかし、宗因の連歌師としての側面のみを評価することは、これを俳諧師としてのみ評価してきた戦前の研究と本質的な違いはない。「連歌師宗因」あるいは「俳諧師宗因」との静態的定義によってその存在を文学史上に固定的に位置づけるのではなく、宗因の人生の各段階における行動と作品が、いかなる文化的・社会的状況のもとにとられ、生み出されたのか、その変化の意味を問い、その存在を動態的に解明することこそが重要なのである。

かかる問題意識のもと、本研究は、宗因について同時代的に生成され伝承された虚像を解体すること、および、近世武家社会のなかにその実像を提示することを目指して、「俳諧師宗因の虚と実」「連歌師宗因の実と虚」「西山宗因年譜考証」の三部により構成する。

第一部「俳諧師宗因の虚と実」には、談林俳諧の祖としての「俳諧師宗因」像と、その反措定としての「連歌師宗因」像の出所を検証した論文二編と、宗因の俳諧活動の実態に迫る論文三編を収める。

第一章「晩年の宗因—宗因伝記研究をめぐる覚書—」は、晩年の宗因の俳諧倦怠と連歌回帰を説く定説が、宗因百回忌を記念して安永十年（1781）に刊行された『梅翁宗因発句集』に発すること、その根拠となる宗因書簡が、文化十年（1813）刊『玉池雜藻』に掲載された断簡であることを指摘する。「宗因連歌回帰説」をいったん留保したうえで晩年の宗因の活動を概観すれば、連歌と俳諧を時と場に応じて詠み分ける二面性が浮かびあがり、俳諧論争が熾烈を極めた延宝八年（1680）以降にあっても、宗因の行動に特段の変化は認められない。以上を問題の端緒として、確実な資料に拠りつつ宗因の行動と作品を再検証する必要性を提言する。

第二章「宗因顕彰とその時代」は、宗因の俳諧発句集が、宗因没後百年の安永年間に複数刊行されているという事実に着目し、近世後期の大坂・江戸俳壇において展開された宗因顕彰運動の実態と方法を明らかにする。大坂では、一炊庵小野紹簾に俳諧を学んだ上田秋成が、安永六年（1777）九月、宗因俳諧発句集の嚆矢『むかし口』を編纂刊行した。その背景には、一炊庵二世木田几掌を中心とする、宗因流俳諧を称揚し、これを継承しようとする動きがあった。「浪速正檀林」を標榜した一炊庵三世宮田泊帆も、寛政十二年（1800）、『宗因文集』を刊行している。江戸では、「江戸談林七世」を自称する谷素外によって、宗因百回忌正当の安永十年春、『梅翁宗因発句集』が編纂刊行された。素外とその一門は、同書の増補修訂と併行して、江戸・鎌倉・大坂に宗因句碑を建立し、「西山家連俳系譜」を作成するなど、談林諸家の追慕顕彰にも励んでいる。「西山家連俳系譜」の「江戸俳諧伝系」は、素外を起点として、蒼狐・旧室・逸志・才麿・西鶴と師系を遡行し、江戸談林の祖たる梅翁宗因と素外が繋がることを可視化した俳諧系譜であった。両都の宗因顕彰は、宗因を俳諧中興の祖と仰ぐ芭蕉の言説を根拠とする点で共通し、当時盛行していた蕉風復興運動の影響下に行われたと推測される。「俳諧師宗因」の実像に迫るためには、宗因顕彰運動によって施された宗因評価の枠組みを克服する近代的研究が求められる。

第三章「宗因における出家とその意味」は、従来、その俳諧活動の画期として重視されてきた宗因出家の意味を、資料批判を通して問い直したものである。寛文十年（1670）二月、

豊前小倉藩主小笠原忠真の招聘を受けて西国下向中の宗因が、同地の広寿山福聚寺で出家した経緯は、法雲明洞による「西翁隠士為僧序」に詳しい。但し、宗因の出家を西行に擬して語る同序には、虚構や誇張が多分に含まれており、注意を要する。宗因の西行憧憬を象徴する法号「西翁」も、実は、過去十年にわたって俳諧の席で使用されてきた連歌師宗因の別号であった。西国下向中の宗因が、流行の最先端をゆく黄檗寺院で出家したという情報は、西国の風俗や文化を詠み込んだ宗因の俳諧発句とともに、松江重頼を介して三都の俳壇に伝播する。帰坂後の宗因の俳諧活動がにわかに活発化し、やがて大坂俳壇の領袖の地位に収まる背景には、黄檗帰依を含む西国体験をめぐる、宗因の自己演出があったと考えられるのである。「西国行脚の翁」の寓意も加味された「西翁」号は、宗因にとって、連歌師から俳諧師への転向を正当化する方便でもあった。

第四章「宗因と伊勢 続貂」は、宗因流俳諧が守武風・守武流を標榜した由来を、宗因と伊勢の人々との具体的交渉のなかに模索した尾形仿「宗因と伊勢」（『連歌俳諧研究』5、1953年10月）の問題意識を継承しつつ、内宮長官荒木田氏富との関係性に偏重したその結論を批判し、宗因が神宮連歌壇・伊勢俳壇の多様な階層と交流した事実を実証する。宗因は、その生涯において少なくとも五度伊勢に下向した。万治三―四年（1660-1661）の下向については、従来、一子宗春との両吟にかかる大神宮法楽連歌の興行を主目的とすると捉えられてきたが、『伊勢正直集』等の分析によって、外宮門前町山田に集住する御師たちが宗因の伊勢滞在を支えていた事実を明らかにした。寛文十三年（1673）・延宝四年（1676）・同七年（1679）の伊勢下向は氏富の強い招請によって実現するものの、いずれの機会にあっても、宗因は、外宮権禰宜松木慶彦・足代弘氏や内宮権禰宜藤波氏守等の仲介によって、神宮家から地下に至る様々な人々と連俳の席をともにしている。宗因が、守武を俳祖と仰ぐ山田俳壇と接触していたことは確実である。大坂俳壇の旗印「守武流」は、宗因と山田衆の直接交流の所産として理解すべきであろう。

第五章「連歌師宗因の俳諧点業」は、西鶴大矢数に対する宗因褒詞の真偽を問題の端緒として、連歌師宗因における俳諧点業の実態について考察したものである。俳諧点者としての宗因は、相手の俳歴・俳系を問わず一貫して修辭的・儀礼的な褒詞を与えており、西鶴の矢数俳諧成功を「日本第一、前代未聞」と称賛したとしても不思議ではない。寛文―延宝期の宗因加点俳巻は五十八巻にのぼり、当該期の宗因が、俳諧点業に精励していた事実をうかがわせる。乾裕幸「俳諧点者宗因の誕生」（『俳学掌記―俳人・俳句・書物との遭遇―』、1989年、和泉書院）が指摘する、寛文中期以降の宗因の加点姿勢の変化は、より積極的に俳諧を兼業するようになった連歌師宗因の生活の変化を示唆しよう。延宝八年四月跋刊『俳諧綾巻』によれば、宗因は、点料稼ぎのため、依頼された俳巻にことさらに入念な評語を書き付けたと伝えられる。宗因評語に認められる付句との唱和性や機知諧謔性は、梅翁点巻として刊行され、不特定多数の読者を啓蒙することを前提とした特性であった可能性も考えられよう。

第二部「連歌師宗因の実と虚」は、諸大名との交渉のなかから生まれた宗因の紀行・連歌作品をとりあげ、創作の主題と方法を明らかにした論文四編と、肥後加藤家牢人から職業連歌師に転じた宗因の行動を追究した論文一編を収める。

第一章「『肥後道記』の典拠と主題」は、肥後加藤家牢人となった宗因の実体験に基づく寛永十年（1633）成立の紀行『肥後道記』の作品論である。佐川町立青山文庫所蔵の宗因自筆本は外題簽を欠き、作者名も「幽林野子」なる匿名で書かれている。「肥後道記」の原題簽を有する天理図書館綿屋文庫本は青山文庫本とは別の宗因自筆本の転写と推測され、両本を含む現存諸本七本は、その本文から、青山文庫本系統と綿屋文庫本系に大別することができる。石川真弘「西山宗因『肥後道記』小見」（『俳文学研究』18、1992年10月）は、宗因の実人生と直接的に結びつけて理解してきた従前の研究史を否定し、同書を、『土佐日記』に代表される古典を範とした文学作品として評価した。しかし、『肥後道記』における最も重要な典拠は『源氏物語』である。『肥後道記』は、主君加藤正方を源氏に、宗因をその従者惟光に擬しつつ、『源氏物語』須磨・明石巻の引用を繰り返し、加藤家改易による流

離を源氏の須磨流謫と重ね合わせて語る。『肥後道記』の主題は主君再起の祈願にあり、正方および加藤家牢人に読まれることを目的として書かれたのである。

第二章「陸奥行脚とその紀行」は、寛文二年（1662）の陸奥行脚に基づく宗因の奥州紀行を対象とする。本作には五本もの宗因自筆本が存在するが、題号を持たず、巻末に宗因独吟連歌百韻を有する系統の本文と、「奥州塩竈記」「陸奥塩竈一見記」「松島一見記」の各題号を持つ系統の本文に大別することができる。いまの「翁」の東下りという『伊勢物語』を基盤とする主題は両系統に共通するものの、その結末は大きく異なる。すなわち、娘死没の悲報によって暗転する無題本系本文に対し、有題本系本文では天下泰平を象徴する江戸の正月祝儀で物語が閉じられるのである。紀行本文が娘追善百韻の前書として機能する無題本系本文が原型と考えられ、有題系本文は、床飾りにも似つかわしい祝言の物語として、需要に応じて二次的に生成したと推測される。

第三章「大坂城代青山宗俊との交渉」では、篠山市立青山歴史村青山会文庫所蔵の右筆日記に拠りつつ、大坂城代青山宗俊と宗因の交流の様相について報告する。右筆日記寛文七年（1667）・同八年（1668）・延宝五年（1677）の各冊に、宗因は、総計三十一回記録されている。宗因は、およそ月に一度の頻度で城代下屋敷に伺候し、尼崎又右衛門・山村与助・岡本重当のような大坂の門閥町人や、医師古林立庵・青木玄智、京都の棋士安井氏・古筆家了栄・大経師康怡・呉服商笹屋半四郎等とともに、城代宗俊の相伴役をつとめていた。宗因は、大坂天満宮連歌所の宗匠として大坂城代の祈禱連歌を代作するばかりでなく、その下屋敷に頻繁に出入りし、大坂文化の興隆を支える各層との交流を重ねていたのである。

第四章「『明石山庄記』と『明石浦人丸社千句』」は、播磨明石藩主松平信之との交流のなかから生まれた宗因の紀行と連歌をとりあげ、その主題と方法を論じたものである。信之の鷹狩に随伴して訪れた明石郡神出庄の山荘の風光を叙述した紀行には、宗因自筆本が三本存在する。綿屋文庫蔵『明石山庄記』と柿衛文庫蔵『赤石山庄記』は、本文に小異を含むものの、『源氏物語』をはじめとする古典をふまえつつ、神出山荘の風雅を信之の政事と文事のよき体現として称えるという主題においては共通する。両本の異同のうち、成立を寛文十一年（1671）十二月とする綿屋文庫本奥書と、寛文十二年（1672）十二月とする柿衛文庫本奥書の対立は特に重要である。同様の年記の齟齬は、延宝二年（1674）興行の明石人丸社法楽宗因独吟『賦御何連歌百韻』端作にも認められる。宗因は、信之献上本には正しい年記を記し、信之以外の人々の需めに応えて別本を作成する場合は、意図的に事実と異なる年次を記したうえ、本文にも主題には影響しない程度の改変を加えていた。また、近年、早稲田大学図書館雲英文庫の収蔵に帰した寛文十二年正月興行『明石浦人丸社千句』は、信之の当厄祈禱のため、宗因と信之家中によって興行され、明石人丸社に奉納された連歌千句である。

第五章「主従の連歌から職業としての連歌へー近世武家社会における連歌の情理ー」では、連歌師宗因の存在を近世武家社会の論理のなかに位置づけるべく、地方の下級武士として生まれた宗因が、牢人を経て職業連歌師に転身する過程を詳細に追跡した。宗因が十五歳で出仕した加藤正方は、元和四年（1618）五月の御家騒動に勝利して以来、肥後加藤家二代忠広政権の筆頭家老として藩内随一の権勢を誇った。肥後加藤家には明智光秀旧臣を中心に連歌愛好の士が多く、天正一慶長年間には紹巴門の連歌師素丹が熊本連歌壇を牽引していた。また、清正・忠広の二代にわたって加藤家に仕えた東久世通堅の三男下津棒庵は、京都の公家・町衆・連歌師との交際で獲得した文化や情報を加藤家にもたらした。宗因が、元和八年（1622）から寛永六年（1629）にかかる八年間、里村昌琢に入門して連歌を学んだ背景には、京都との繋がりを重視してきた清正以来の加藤家の方針があったと考えられる。忠広嫡子光正の元服祝儀として寛永八年（1631）三月に興行された『正方・宗因両吟千句』に見るように、宗因の連歌は、加藤家の家中統制の姿勢を形象化する機能を担っていたのである。ところが、寛永九年（1632）五月の加藤家改易によって正方と宗因は熊本を追われ、上京して牢人となる。加藤家ゆかりの本国寺門前を拠点としたその牢人生活は、『肥後道記』の語りとは正反対の、豪奢で文化的な生活であったが、連歌や茶事を政治利用した再仕官運動は実らず、同二十一年（1644）八月、正方は安芸広島浅野家に預けられる。宗因は伏見奉

行小堀政一の天満屋敷に移り、やがて大坂天満宮連歌所宗匠となるが、病中の正方を広島に見舞い、述懐の連歌を両吟するなど、正方付きの連歌師としての役割を全うした。武家・牢人時代の宗因の連歌には、正方との情誼的主従関係を基盤として、秩序構築や社交に資する実利性と、現実を美化する虚構性の二面があった。いっぽう、正方没後の宗因は、小笠原家に非定期で奉仕し、庶出子の藩主擁立やその政権維持に資するような連歌を断続的に興行している。職業連歌師となった宗因の連歌は、権力機構の外部にあって権力者の需要に応じるという、合理的な性格に傾いていった。

第三部「西山宗因年譜考証」は、生誕から没後一年までの宗因の全行動・全作品を対象とし、それらを近世初期の文化・政治・社会の状況をふまえつつ考証した年譜である。肥後加藤家牢人から出発した宗因が、専属的雇用を拒んで連歌と俳諧を兼業し、定住と遊行の二重生活を送ったことを明らかにした。